

Jan. 2014

ZENBI

全国美術館会議機関誌

January 2014 [Vol.5]

企画委員会委員長に就任して 雪山行二 ― 1

ブロック報告

〔北海道〕美術博物館の自覚と矜持 中村聖司 ― 2

〔東北〕青森にて芸術祭の機運 飯田高誉 ― 4

〔関東〕展覧会における人、資料、作品 中村尚明 ― 6

〔東京〕「空想の美術館」を越えて 藪前知子 ― 8

〔北信越〕移動とネットワーク 芹川貞夫 ― 10

〔東海〕つれづれに思うこと 毛利伊知郎 ― 12

〔近畿〕工芸の展覧会について 出川哲朗 ― 14

〔中国〕岡山の美術界―アートイベント花盛り― 上蘭四郎 ― 16

〔四国〕「瀬戸内国際芸術祭」と「大塚国際美術館」の現状報告 安東七瀬 ― 18

〔九州〕それぞれの戦後、回顧して何を思う 那須孝幸 ― 20

部会報告

保存研究部会 根本亮子 ― 22

教育普及研究部会 清家三智 ― 23

情報・資料研究部会 川口雅子 ― 24

小規模館研究部会 宮崎 徹 ― 25

ホームページ部会 宮武 弘 ― 26

機関誌部会 尾崎信一郎 ― 27

美術館運営制度研究部会 大島徹也 ― 28

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 29

事務局から 30

編集後記 31

全美フォーラム

01 瀬戸内アートエッセイ 毛利義嗣 F-01

02 石元泰博コレクションと石元泰博フォトセンターのこれから 川浪千鶴 F-04

03 東京国立博物館のSNS 小林 牧 F-07

ISSN 2186-7259

ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.5 2014年1月1日発行 ©全国美術館会議

〔編集〕全国美術館会議機関誌部会 編集幹事 尾崎信一郎 松山利光

〔発行者〕全国美術館会議 〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7 国立西洋美術館内 TEL 03-3828-0290

〔デザイン〕宮谷一孝（株式会社エヌ・シー・ビー）〔印刷〕日本写真印刷株式会社 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3

企画委員会委員長に就任して

東日本大震災における全国美術館会議の文化財救援活動には本当に目を見張るものがあった。全国各地の加盟館から多くの館員が被災地に駆けつけて救援活動に参加した。それも活動は長期にわたり、いまでも続いている。また、東京でチャリティー・オークションを開催することによって、文化財救援活動の意義を世に広く訴えとともに必要な活動資金を自ら集めるなど、後方支援の態勢を作ることにも成功した。日常の業務に追われながらも救援活動に参加された方々、そして、陣頭指揮をとられた青柳前会長をはじめ事務局スタッフ、各研究部会のメンバーならびに高階前企画委員長に心から敬意を表したい。

私が全国美術館会議と出会ったのは、阪神淡路大震災の「美術館救援隊」に参加した1995年のことであるから、38年近くにおよぶ美術館生活のなかではそれほど古いことではない。救援活動に参加したとはいっても、実は神戸の中心街で自動車事故を起こして警察のご厄介になるなど、何も役に立たなかった。しかし、この経験はいろいろな意味で勉強になった。当時国立西洋美術館の学芸課長の職にありながら、私は阪神淡路大震災が起こるまで、不覚にも西洋美術館が全国美術館会議の加盟館であることすら知らなかったのである。

阪神淡路大震災の文化財救援活動は、いまの全美をかたちづくる上で重要な契機になったと思う。これに前後してさまざまなワーキンググループが誕生して横の連携が生まれ、個々の館員が主体的に活動に参加するようになった。その後ワーキンググループは研究部会と名称を変えたが、その地道な活動の積み重ねが東日本大震災の文化財救援活動に結実したのだと思う。

私は西洋美術館を皮切りに5つの美術館を経験した。いずれの館もそれぞれ難しい問題をかかえている。加盟館の館員が、さらには広く美術館関係者が、情報と問題意識を共有し、たがいに知恵を出し合うことによって難局に立ち向かう、全国美術館会議がそのような場になるよう、私は非力ながら努力したいと思っている。

皆様の一層のご協力を心からお願いする次第である。

企画委員会委員長 雪山行二（ゆきやま こうじ・富山県立近代美術館）

美術博物館の自覚と矜持

中村聖司（なかむら せいじ・北海道立近代美術館）



北海道では今年（2013 年）7 月、新たな美術館が開館した。

正確には、苫小牧市美術博物館。1985 年に設立された苫小牧市博物館が、このたび施設の増築と改修、そして美術専門の学芸員の配置等によって博物館と美術館を兼ねた機関となり、名称も変わってスタートを切ったのである。

開館記念展は、出光美術館所蔵の江戸時代前期の陶磁器展。次は地元の油彩画家・遠藤ミマンの生誕 100 年記念展であった。前者が苫小牧の産業にきわめて重要な本州企業の出光興産との関係による祝祭的な展覧会、後者が美術家の検証という美術館活動の基礎固めとするなら、第 3 回目の「夢を形に〜砂浜と原野にいどんだ時代〜」（10 月 12 日〜11 月 24 日）は、いよいよ美術博物館としての個性をあらわし始めた展覧会と言えよう。

「夢を形に」展は、街の発展を促した苫小牧港の開港 50 周年記念として、「市民と歩んだ港の歴史を振り返る」（同展チラシより）企画である。太平洋に面した苫小牧は、江戸時代には内陸の河川を利用して太平洋と日本海を結ぶ交通の要衝であり、物資の集積地であった。明治以降の陸路の開削とともにこの役割は薄れるが、大正期に住民から漁港建設の動きが起り、昭和戦前期には工業港の構想が地元と北海道庁の両方から示されるに至った。国の予算が付いた 1950 年から港作りが始まり、1963 年に完成。今や取扱貨物量は北海道全体の 47 パーセント（2011 年度の資料）にの

ぼる（以上、同展パンフレットより）。なお、美術作品を北海道外と札幌等との間で輸送する際にも、苫小牧と東北の八戸を約 8 時間で結ぶフェリーが頻繁に使われる。例の「美専車同乗」のため筆者も船上で何度か夜明かしをしたひとりだが、北海道の美術館で仕事をする人間にとっても苫小牧は重要な玄関口なのである。

さて、展示資料は江戸時代の漁業関係遺物から現代の港湾の風景画まで、苫小牧港の歴史に関わる 142 点。そのうち、たとえば 1950 年代の調査測定機器や潜水ヘルメットなどは、どちらかというと博物館寄りのものであろう。一方、江戸時代の船絵馬や般若の文様が施された半纏、大正昭和に工房を率いて全国各地の鳥瞰図を描きに描いた絵師・吉田初三郎による戦後苫小牧の図、内陸が大きく掘り込まれ港湾が建設されていく過程を私費で撮影し続けた地元の写真館館主・志方孝之による多数のドキュメント写真等は、博物館的とも美術館的とも言える。そしてさまざまな画家による開港後の風景画は、美術資料としての性格が強い。

むろん、ある資料が博物館向きか美術館向きかという区分にあまり意味はない。ここで指摘したいのは、博物館と美術館の要素を交差させることが、企画側の積極的な取り組みとして見受けられたことだ。こうした発想と手法それ自体は特別に奇を衒うものではないが、博物館であり美術館である同館スタッフの自覚と矜持を伝えと同時に、コレクションの活用や研究成果の総合という点で、今後

の特色ある活動に通じる豊かな可能性を確かに提示していたのである。オープン記念の冠こそ付けられていないものの、地域の美術博物館の出発を告げるにふさわしい企画であった。

記念と言えば、今年は北海道出身の日本画家・岩橋英遠の生誕 110 年にあたり、札幌の北海道立近代美術館と生まれ故郷にある滝川市美術自然史館が、それぞれコレクションを生かした展覧会を実施した。前者（4 月 20 日〜6 月 16 日）では札幌の神社が所蔵する 1947 年作の屏風が 35 年ぶりに展示され、後者（9 月 7 日〜10 月 20 日）では生涯のスケッチ多数が初公開された。作家の人物であろうか、スケッチは実に生真面目なものであり、その掘り起こしは英遠の芸術家像に新たな光を投げかけるというよりも従来の研究にさらなる厚

みを加えることになるのであろう。

なお、美術館以外の企画として「ハルカヤマ藝術要塞 2013」（9 月 8 日〜10 月 5 日）をあげておきたい。これは札幌と小樽の境に位置する春香山を舞台に現役作家たちが企画した野外美術展で、2 年ぶり 2 度目の開催。旧観光ホテルと彫刻家・本郷新の旧アトリエが廃墟として残り、手入れのされていない山を、アートによって「再生」するのがテーマだ。自然と人間の関係や地域の再生という現代社会の切実な課題を象徴するような場所での取り組みである。しかしそれを大上段に掲げるのではなく、「要塞」という子どもの秘密基地ごっこを想起させる言葉を選び、「山を遊ぶ、アートで遊ぶ。」をキャッチコピーに据えて、67 名の作家が思い思いの創作をのびのびと展開させていたのが印象的であった。



苫小牧市美術博物館



「夢を形に〜砂浜と原野にいどんだ時代〜」 展会場

青森にて芸術祭の機運

飯田高誉（いいたかよ・青森県立美術館）

青森県では芸術祭の機運が高まっている。十和田市現代美術館がプロデュースした芸術祭と青森県立美術館が現在計画中の芸術祭について触れておきたい。青森県十和田市は、十和田市現代美術館開館5周年を記念して、美術館を中心とした市街地と豊かな自然にめぐまれた奥入瀬、さらに十和田湖を舞台に、アーティスティック・ディレクターに藤浩志を迎え、「十和田奥入瀬芸術祭」を開催することとなった。豊かな自然にめぐまれた青森・奥入瀬と十和田湖周辺や市街地を舞台にした芸術祭『十和田奥入瀬芸術祭「SURVIVE」』が、9月21日から11月24日まで開催された。「時」をテーマに、美術家だけでなく、詩人や小説家、演出家、音楽家など、さまざまなアーティストが、視覚芸術、文学、演劇、音楽、空間構成などの横断的要素を取り入れた作品によって「時」を読み解いていくものであった。また、作家や地域住民によるゼミナールなどの関連企画も開催され、さらに特別参加アーティストとして青森出身の美術作家・奈良美智のディレクションによる「青い森の小さな音楽会」も開催された。出演者は、おおはた雄一、タテカコ、照井利幸（元 BLANKEY JET CITY）等の他、大友良英が参加した。会場は岡本太郎が手掛けたアルミ合金の高さ10メートル重さ7トンにもおよぶ大暖炉作品『河神』とその対になる作品である高さ8.5メートル重さ5トンのブロンズ製の暖炉『森の神話』が設置されている星野リゾート奥入瀬溪流ホテルであった。

同芸術祭のアーティスティック・ディレクターを務める藤浩志は「これまで社会的に価値を認められていなかった意識の中に、次の時代を超えて生きるための多くの可能性が潜んでいる。そんなことを深め考えようとしている人々の態度と出会ってほしい。そんな芸術祭であってほしい」と語っている。本芸術祭は、展覧会、コンセプトブックの発行、ゼミナールの開催を3つの柱とし構成され、「さまざまな時間の旅」をテーマに、十和田奥入瀬エリアの深い自然と現代の芸術文化が融合することで、多様な経験を観客に提供し、他の芸術祭とは一線を画す新しい芸術祭を目指したものである。十和田奥入瀬エリアに存在する遊休施設を使ったユニークな展示構成や、美術家のみならず小説家、詩人、演劇界からも参加する作家のラインナップなど、さまざまな要素を取り入れながら「時」を読み解く壮大な物語が展開されることとなった。全国で開催される芸術祭の中でも、「十和田奥入瀬芸術祭」は特に自然環境のなかで人の生活との親和性を追求しており、芸術祭の会場、太古の昔から変わらずに生き続ける自然、すなわち十和田湖から流れる奥入瀬溪流は、深いブナの原生林と起伏に富んだせせらぎを抱えている。そこに複雑な生態系が息づく原始の森と悠大な「時」の流れが主役の芸術祭であった。そして十和田湖もまた、透明度の高い水と数々の神話性に満ちている。森と湖に囲まれ、美しさを誇る紅葉の季節にこの芸術祭の頂点を迎えるのである。展示作品はすべて十和

田奥入瀬の自然や歴史にインスパイアされてつくられた。太古の物語を囁く大銀杏の木漏れ日を待ち針のスクリーンに映し出す、志村信裕の映像インスタレーション。十和田湖を遊覧する小さな旅を音で綴る、mamoruのサウンドワーク。温泉の水の釉薬を施した焼きものが時おりささやく微かな貫入の音に耳を澄ます、宮永愛子の作品。旧水産保養所の朽ちかけた廃墟には、梅田哲也やコンタクトゴンゾ、志賀理江子による作品が残されている。この芸術祭が今後より一層展開されるかたちで継続されることを望みたい。

一方、青森県立美術館では、開館10周年を記念して国際芸術祭「青森 EARTH 2016」が開催予定となっている。今まで、芸術祭開催のためのステップとして青森県立美術館では、「青森 EARTH-超群島展」（2012年）、そして「あいちトリエンナーレ 2013」と広報連携した「青森 EARTH：すばらしい新世界-再魔術化するユートピア展」（2013年）を連続して企画開催してきた。県立美術館は三内丸山遺跡と地政学的な空間領域や太古からのインスピレーションを共有して

いる。三内丸山遺跡は縄文期の貴重な考古資料の宝庫として世界に誇るべきものである。加えて、そこから出土した土偶、土器、石器等は、日本列島における造形表現の原点としての意味を持っており、世界的にその重要性が認識されている。県立美術館は青森固有の「縄文」の歴史と記憶を現在に結びつけ、創造の原点を問う国内外の作家の参加による芸術祭を2016年（平成28年）に開催予定である。青森の観光資源の代表的な縄文遺跡を現代的視点からアプローチし、青森県のアイデンティティを内外に訴求していくものである。「青森 EARTH」とは、青森県立美術館の設計コンセプトである縄文に創造の原点をたずね、「土着」の意義を見直し、土（earth）に根ざした新しいアート（art）の形を、青森の地で展開しようとする将来を見据えたビジョンを提示するものである。開館10周年（2016年度）における国際芸術祭の開催を一つの目標に、美術館のミッションに即した活動の方向性を示すキーワードとして今年度も常設や諸企画、プロジェクトなどで多角的に展開することとしている。



十和田奥入瀬芸術祭における山本修路の作品展示風景



十和田奥入瀬芸術祭における梅田哲也、コンタクトゴンゾ、志賀理江子の作品発表

展覧会における人、資料、作品

中村尚明（なかむら なおあき・横浜美術館）



冒頭から昔の話で恐縮だが、ロダンから 20 世紀半ばまでの西洋彫刻史を概観する展覧会を企画して各方面に出品をお願いしていたとき、ある相手先から「グループ展よりも個展を優先して貸し出したい」とのお返事を頂戴したことがある。当時は個展こそ展覧会の王道とする意見を一度ならず耳にしたものである。ところで今日、厳密な語義に収まらない「個展」がしばしば行われるようになっていく。

8 月の会期最終日、千葉市美術館に「生誕 130 年 彫刻家・高村光太郎展」(6月29日～8月18日)を観に行った。展覧会は目録上三部構成で、光太郎の彫刻(丸彫りと浮彫)48 点にスケッチブック等を加えたⅠ部、ロダン、光雲、萩原守衛、中原悌二郎に関連作家の彫刻 15 点(会場により変動)によるⅡ部、高村智恵子の紙絵 65 点によるⅢ部。展示ではⅠ部の空間にⅡ部の作品群が挿入されており、光太郎と他作家の比較を促す上で有効であった。両者の点数配分(3 対 1)や作品間の距離もほどよく、とまどう来館者はなかっただろう。Ⅲ部には専用の空間が当てられていた。前半の彫刻家光太郎の世界と、後半の紙絵作家智恵子とそれを見守る夫光太郎の世界が様々に照応できて、全体でひとつの像を結ぶ。続くコレクション展の印象も加わり、心に残る展覧会だった。

ある作家の「個展」を企画しようとして、主たる業績に小品が多いとか、出品点数に限りがある場合、また点数が十分であっても、内容に一層の深

みや広がり求めて資料類や他作家の作品を取り入れるケースが増えている。

書簡や写真、書籍などの「資料」類の展示は、本誌の 4 号で水沼啓和氏が指摘されているように、受容層を限定する。それらは概して展示向きの形状でもない。古い前衛雑誌がケース内に開かれているのを見て感慨に浸るのはかなりの上級者である。分かりやすく見せたいが、情報を伝える資料類を美術館で作品と併置するには、博物館とは別の配慮も必要だ。

主人公以外の作家を含めると、主役脇役の図式が自ずとできる。美術館自体がそういう装置だとする意見はさておき、来館者が作家の序列をば読み取るようでは不本意だし、扱い方によっては作品が資料に見えたり、展覧会が分裂して見えたりするかもしれない。立案から展示まで加減が難しいと思う。

神奈川県立近代美術館では「戦争／美術 1940-1950 モダニズムの連鎖と変容」展(7月6日～10月14日)を観た。葉山館開館 10 周年でもあり、館蔵品を主体に公私所蔵先からの借用を加え、絵画、素描など約 200 点の構成。加えて同時代の書籍・雑誌などの資料類も展示されていた。1940 年代という日本の近代美術史上特異な 10 年間をクローズアップすることで、戦前・戦後という区分法では捉えにくい美術や作家たちのありさまを見つめ直す意欲的な企画であった。画家の戦争責任というような視点からではなく、例えば山口蓬春や藤田嗣治ら成熟したモダニズムを理解し

た画家たちによる、歴史画としての戦争画への取り組みから、「近代の枠組みを超える努力」(水沢勉氏)が考察される。主立った作家は戦前と戦後の作が出ていたが、展示は制作年代による分類なので同じ作家でも離れた場所に登場する。個人の変遷を辿るというより、日本の美術(実質は絵画と版画)の年ごとの成果をひとつひとつ見直そうとしているように思われた。

葉山館の例はあるテーマの下に複数作家で構成され、且つ館蔵品主体で組み立てられた企画展である。筆者の勤める横浜美術館でも館蔵品主体の企画展が増えつつある。そのような企画展こそ美術館本来の精神に適う至極自然な営みだが、コレクション展(常設展)をふたつ開催しているように見えないこともない。横浜では今年からコレクション展もタイトルのなテーマを設定するようになった。会期ごとに担当チームも変わる。常設展の企画展化とは言えないまでも企画展風になった。分野に

より所蔵数の違いや偏りはあるにせよ、幕末明治以降の洋画・日本画からダダ・シュルレアリスムの美術、現代美術や写真まで幅広く擁する当館では、それぞれの代表作を出そうとすると、全体を包括するテーマの設定は難しくなる。10 月から始まった今期は筆者のチームが担当した。「ともだちアーティスト」収蔵作品でつづる芸術家の交友関係」と題し、収蔵作家相互のつながりをテーマとして作品 291 点にエピソード紹介のパネルを交えて構成した。写真作品も積極的に用い、例えばシュルレアリスムの作品群とマン・レイ他によるポートレート群を同じセクション内に共存させた。展示に際しては、芸術家の肖像「写真」がパネルと同格の「資料」に見えてしまわないように気を遣った。作家相互のつながりという人間臭さが表に出てくるようで作品の芸術的内容と離れそうな気もする。紹介するエピソードと作品の関連が鍵になるがそう都合よくいくとも限らない。考えさせられる秋であった。



「ともだちアーティスト」(横浜美術館コレクション展)会場風景

「空想の美術館」を越えて

藪前知子（やぶまえ ともこ・東京都現代美術館）



今年の東京の美術展のひとつの話題と言えば、ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロといういわゆる「ルネサンス三大巨匠」の個展が相次いで開催されたことであろう。それぞれ見どころがあったが、もともと希少な名品の輸入に大変な制約が伴うことを思えば当然のこととして（20点以上を集めたラファエロ展以外は）、決して点数が多いとはいえない「本人の真作」を核に、いかに展覧会を成立させるかに創意工夫が凝らされていたのも印象的であった。特に鑑賞者を惹きつけていたのが、「ミケランジェロ展—天才の軌跡」展（国立西洋美術館、9月6日～11月17日）で展開された、システーナ礼拝堂の4Kシアターであった。4Kとはフルハイビジョンの4倍の画素数を持つ高精細映像である。これを250インチの4Kスクリーンで見るスペクタクルな経験は、天井画という同礼拝堂を実際に鑑賞する際の制約を考えても、リアリティを越えて官能的とも言えるものであり、資料映像どころか、展覧会の見どころの一つとなっていた。そもそも同展が「システーナ礼拝堂500年祭記念」を謳っていることから、「開催9日前に撮影された」というこの映像の成否は、展覧会成立に関わる重要な要素であったであろう。「オリジナル」の複製であるはずの映像が、全く異なる新しい鑑賞体験を与えるという転倒は、展覧会の形を今後変えていく可能性を秘めたものとして感じられた。

もちろん、「オリジナル」に対峙する経験の重要

性は言うまでもなく、刺激的なスペクタクルが展示文化に与える影響については熟慮すべきである。そのことを措いても、高精細映像は「ヴァーチャルなアウラ」とも言うべき視座を提示するものであり、これを新しい展示技術として用いることで、アンドレ・マルローの「空想の美術館」の新たな形での実現可能性が生まれたといっても過言ではないだろう。実際に、高精細デジタル撮影による美術作品の画像データを、新しい美術展コンテンツとして提供するビジネスも動き始めていると聞く。例えば、ある美術史上の重要作品の高精細画像を展覧会の「核」としつつ、それに言及する周辺作品だけで展覧会を構成することも可能となるのである。

さらに、4K映像を用いて大胆な空間演出を行っていたのが、「京都—洛中洛外図と障壁画の美」展（東京国立博物館、10月8日～12月1日）である。ここでは、《洛中洛外図 舟木本》の高精細映像を大スクリーンにて上映するほかに、龍安寺方丈にかつてあった障壁画の展示にあわせ、1年間にわたって撮影された同寺の石庭の四季折々の様子を、16メートルというほぼ原寸大の4Kスクリーンで投影していた。「京都」という文化圏そのものが展示テーマとして掲げられているゆえの演出である。美術館という、「そこではない場所」への転送の試みは、「モローとルオー—聖なるものの継承と変容」（パナソニック汐留ミュージアム、9月7日～12月10日）でも見られた。もとは画家の邸宅であったパリのギュスターヴ・モロー美術

館の空間の4K映像を上映することで、その芸術の真髄を文脈ごと伝えようとするものだ。日本美術を含め、もとの環境との関係が重要な要素となる作品の展示にも、こうした映像技術による臨場感の創出は、新たな潮流を作っていくのかもしれないと想像した。

4Kではないが、映像の用い方で新鮮な印象を受けたのが、東京国立近代美術館で開催された「プレイバック・アーティスト・トーク」展（6月14日～8月4日）である。これは、コレクション展の展示室内で継続的に行ってきた「アーティスト・トーク」の映像を、補足資料的な扱いではなく、スクリーンに投影し、いわば作品と同等の「主役」として展示したものであった。鑑賞者にとってはアトリエの中に導かれるような、作品が生まれる場への想像を促す好企画だった。この展覧会でもう一つ印象的だったのが、会場で流される「アーティスト・トーク」の一部を、YouTubeでも配信していたことだ。続きは展示室で、というプロモーションの役

割を果たすとともに、美術館の展示空間が、ネットワーク上に集積される無数の情報ともはや地続きであることを実感させられた。

グーグルの「アート・プロジェクト」にアクセスすれば、家に居ながらにして世界中の美術館を「体験」できる時代である。美術館に「行く」ばかりではない利用の提案として、アムステルダム国立美術館が、全収蔵作品の高解像度の画像を無料でダウンロードできるシステムを公開したことも記憶に新しい。高精細映像の利用は、「オリジナルの力」に頼るばかりでない、美術館でのサイトスペシフィックな体験の内容が改めて問われた結果とも言えるだろう。一方で、新しい映像技術は美術館にとって、使いこなせば無数の可能性を拓くものだが、ひとつ誤れば自らの存在を危うくするような、もろ刃の剣であることも忘れずにおきたい。「オリジナル」の体験の意義を伝えることが、美術館の重要な使命であることに変わりはないからである。



「特別展 京都—洛中洛外図と障壁画の美」
（東京国立博物館、10月8日～12月1日）龍安寺石庭 4K映像 ©NTV



「プレイバック・アーティスト・トーク」会場風景
（東京国立近代美術館、6月14日～8月4日 撮影 木奥恵三）

移動とネットワーク

芹川貞夫（せりがわ さだお・福井県立美術館）



記録的な猛暑となった今夏、当福井県立美術館においても記録が生まれることとなった。6月28日から8月25日まで開催されたシスティーナ礼拝堂500年祭記念「ミケランジェロ展 ― 天才の軌跡」では入場者数記録が大幅に更新されたのである。自館のことで大変恐縮ではあるが、開催会場が当館と上野の国立西洋美術館（9月6日～11月17日）のみだったため、近隣以外からも少なからず問い合わせをいただき、県外からの来場者（主に中部、北陸、関西）も多かったため、北信越ブロックの話題の一つとしてここで触れさせていただく。

本展は、「ラファエロ」展「レオナルド・ダ・ヴィンチ」展とともに、「日本におけるイタリア2013」の関連イベントとして開催されたもので、世界最大数のミケランジェロ作品・資料を所蔵するカーサ・ブオナローティ美術館（フィレンツェ）のコレクションより、素描や自筆の手紙、小型彫刻、関連作品など59点が出品された。目玉は、長年門外不出扱いをされてきた、現存する最初期の大石浮彫《階段の聖母》を筆頭に、貴重なデッサン類と小型彫刻で、出品作品の半数以上が日本初公開、ミケランジェロ自作の展示品は手紙等を含め35点であった。

展覧会には連日、県内外から大勢の美術ファンが詰めかけた。休館日の臨時開館や開館時間の延長、臨時駐車場からのシャトルバスの運行等により、最終的な入場者数は県内の美術展では過去最多となる88,027人を記録した。

なお福井県では、平成24年度から県立の文化施設が教育委員会から知事部局の観光営業部傘下に移ったため、本展は本年度の観光客誘致事業の一つに位置づけられた。そのため、各旅行代理店等によって、県内観光地やイベントとのタイアップ企画が組まれ、観光客誘致に貢献することとなった。更には、地元商店街、イタリアンレストラン、図書館、書店、地元公共交通機関等との連携イベントを立ち上げ、複合的な地域おこしにつながる結果ともなった。

因みに今年度は、お隣りの石川県立美術館でも、「国宝 薬師寺展」（4月26日～6月23日）で、来館者96,000人という開館以来の記録を出し、金沢21世紀美術館では、期間が約4ヶ月と長いとは言え、9月1日まで開催していた企画展「内臓感覚」の入場者数が約108,000人におよんだ。地方でも、大型美術展が大都市圏のように、多くの人々の移動を促す要素になっているのである。

ところで、ミケランジェロ展において予想外の誘客動向がみられたので少し触れておきたい。それは、関東方面から、東京展での混雑を避けるため、旅行も兼ねてあえて遠隔地の福井へ出向くという来館者が少なかったことである。こうした事象は、今、北陸地方で最もホットな話題である2015年春の北陸新幹線の開業に関連して、今後の美術館や展覧会のあり方に影響して来ることであり、北陸の美術関係者の一人としては大変興味深いことなのである。

JRは、北陸新幹線開業に合わせ、2015年10月1日～12月31日の期間、富山県・石川県・福井県でのデスティネーション・キャンペーンの展開を決定したが、このようなJRと各自治体、地元観光事業者等が協働で実施する大型観光キャンペーンは、対象地域にとどまらない広範囲への影響が予想されており、これまでとは全く違った人の動きも考えられるのである。

先ごろより報道されている富山県立近代美術館新築移転の話題は、美術館に関連したその最も顕著なものともいえるが、展覧会に関しては、各館とも新幹線開業に合わせた展覧会ラインナップをほぼ固めたとも聞く。おおむね地域固有の特色や文化財等を前面に押し出した企画と、大量動員が見込まれる大型展との二本立てとなりそうであるが、動向が注目されるところである。

このように、日本全国でいつのまにか定着したようにもみえる「観光とアート」のカップリングには、今北陸地方で熱い視線が注がれているのである。

交通インフラ整備に対し、ソフト面でのネットワーク拡大の動きもある。これは北信越ブロックに限定されたことではないが、福井県他全国13県で構成する「自立と分散で日本を変えるふるさと知事ネットワーク」では、県立美術館同士の相互交流事業を推進している。青森、山形、石川、福井、山梨、長野、三重、奈良、鳥取、島根、高知、熊本、宮崎の地勢の異なる各県が、「ローカル・アンド・ローカル」の発想の下、新しいつながりを模索中である。昨年度から来年度にかけて、三重、奈良、福井、青森、長野で、所蔵品の交流による小企画や常設展が実施されている。すでにコレクションの相互交流が恒常化している美術館において、自治体の中枢部が主導する政策としてのネットワークから、新たに何を引き出せるのか、試行は続けられる。人が動き、作品が動き、美術館さえも移動する。あるテリトリーに求心的に存在するという美術館像は、過去のものになりつつあるとの思いを強くしている。



福井県立美術館「ミケランジェロ展―天才の軌跡」会場風景

つれづれに思うこと

毛利伊知郎（もうり いちろう・三重県立美術館）



愛知・岐阜・静岡・三重4県からなる全海の東海ブロックの中心は、一般的には名古屋市と考えられる。しかし、静岡県の東部は首都圏との結びつきが強く、岐阜県北部の飛騨地方は北陸方面との関係が強い。また、三重県は近畿地方（関西）との往来も盛んだ。ブロック全体の総括は困難だが、先ず昨春以降のこの地域での大きな話題として、2回目の「あいちトリエンナーレ」と富士山（「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」）の世界文化遺産登録を記念した静岡県内での美術展に触れておこう。

2回目を迎えたあいちトリエンナーレは、五十嵐太郎氏を芸術監督に東日本大震災と関連する「揺れる大地―われわれはどこに立っているのか：場所、記憶、そして復活」というテーマを掲げて8月から開催された。

今回はメイン会場が名古屋市内に加えて岡崎市内にも設けられ、各種連携事業が岐阜・三重両県でも実施されるなど、初回に比べて地域的な広がりが増したと思われる。愛知県が実施主体の催しであるから、事業実施地域が原則同県内に限定されるのは当然である。しかし、東海地方、特に愛知・岐阜・三重3県の結びつきの強さを考慮すると、この催しが県境を越えて東海地方に定着し、3年ごとの開催が地域の人々から待ち望まれるようになることを期待したいところだ。

一方、富士山の世界遺産登録記念展覧会は、担当学芸員をはじめとする館員の労苦が大きかつ

たのではないかと気がかりである。そのように筆者が推測するのは、世界遺産登録決定（6月26日）から展覧会開幕（MOA美術館の「描かれた富士」展は7月26日初日、静岡県立美術館の「富士山の絵画」展は9月7日初日）までが短期間であったからである。

出品交渉などの準備は登録決定前から行われていただろうが、ポスターやチラシなどの文字稿最終決定と制作、広報活動などのスケジュールはタイトにならざるをえなかっただろう。

地域の大きな出来事とタイアップした催しを美術館が行うことは悪いことではない。公立館では、所属する自治体の動きを斟酌しつつ活動プログラムを組み立てることも必要である。また、昨今は私立の館でも美術館の在り方に強い関心が向けられていることを考慮すれば、地域のビッグイベントとの連携が考慮されるのは当然のことだろう。しかし、そのために準備作業が影響を受けるのは考えものと思うのは筆者だけだろうか。

次に公立美術館の運営に関する話題にも触れておこう。三重県では2014年4月の新県立博物館開館と関連して、これまで直営であった県立美術館、県立図書館などの運営形態見直しが議論されている。指定管理者制度か、あるいは昨年6月に総務大臣が公立博物館に適用を発表した地方独立行政法人か、現時点では方向性は不透明である。しかし、財政難が長期化する県の現況を考慮すると、直営継続の可能性は小さいだろう。

一方、愛知県では愛知芸術文化センターに指定管理者制度が導入されることが発表された。同センター内の愛知県美術館は直営が継続されるが、予算や組織面で美術館に影響が及ぶ可能性も想定され、今後の推移が注目される。

ところで、今夏は全国的な猛暑が話題となった。東海地方も連日最高気温が摂氏40度前後という日が続いた。これだけ猛暑が続くと夏の展覧会や教育活動の在り方について再考が必要かもしれない。

美術館内は空調がされていることから、クールシェアと称して美術館などの利用をPRしている自治体も少なくない。しかし、高齢者など暑さに弱い人々が、炎天下に美術館へ出かけることは厳しいだろう。また、ワークショップなどを屋外で行う場合の熱中症対策も従来以上に配慮が必要だろう。

また、筆者が勤務する美術館では7～8月の電

気代が昨年を上回り、経理担当者の顔は曇りがちだ。猛暑に伴って空調設備がフル稼働した結果、予想を越えた電気料金、空調設備のメンテに頭を悩ませた美術館も少なくないだろう。

節電時の美術館内の空気環境については、一昨年7月に全海のホームページに「節電時の空気環境づくりの考え方に関する指針について」が掲載されたが、気候変動が今後も続くなら、夏季の作品輸送時の作品保護についても検討されるべきかもしれない。近年の美術品輸送車はエアコン標準装備だが、その能力にも限りがあるだろう。猛暑の中美術品を長時間輸送して盛んに展覧会を開催し続けて大丈夫なのか、非常に気がかりである。

とりとめのない話題に終始してしまった。美術館関係者の集まりで明るい話題が聞かれなくなって久しい。何とかこの閉塞感を払拭したいと改めて思う今日この頃である。



「あいちトリエンナーレ 2013」会場風景（愛知県美術館）

工芸の展覧会について

出川哲朗（でかわ てつろう・大阪市立東洋陶磁美術館）



展覧会担当の学芸員が企画し、長年の調査に基づき、心血を注いで、作り上げた展覧会では、スペースや予算上の制約がなければ、もっと、拡大したかったに違いないと感じさせられることがしばしばある。あるいは、次回には別のアプローチで展覧会をしてみたいと思うに違いない。学芸員ならば、どこかで妥協しなければ、展覧会が実現しないことを見極めるすべを知っているが、もし、バイタリティのある学芸員ならば、ドリームプランを実現するために、予算獲得や協賛金を集めることにもエネルギーを注ぐこともあったであろう。

近畿ブロックでは工芸に関しての素晴らしい展覧会がいくつも開催された。工芸は西洋美術史の中では、絵画や彫刻といった本流の中で捉えられることが少ないが、日本や中国、韓国では、工芸もまた美術史の大きな柱のひとつであると認識されている。工芸の優れた展覧会を見れば、そのことが実感できるであろう。陶芸やテキスタイル、ガラスなど高いレベルの展覧会が近畿ブロックで見ることが出来た。

京都国立近代美術館の「泥象 鈴木治の世界―「使う陶」から「観る陶」、そして「詠む陶」へ―」（7月12日～8月25日）は展覧会のサブタイトルにあるように、鈴木治の手がけた仕事が万遍なく集められ、鈴木治の目指した作品志向がよくわかるものであった。また「皇室の名品―近代日本美術の粋」（11月9日～1月13日）では、宮内庁の共催で三の丸尚蔵館に所蔵される工芸作品をはじめ

として、素晴らしい作品が多数紹介された。特に、工芸については、近代日本の最高峰の作品ばかりであると言っても過言ではない。京都国立博物館での「魅惑の清朝陶磁」（10月12日～12月15日）では日本に将来された清朝陶磁を概観できる充実した展覧会である。江戸時代にこれほどさまざまな清朝陶磁が輸入されてきていることを出土資料も交えて丁寧にその実態に迫るものであった。京都市美術館では京都市美術館開館80周年記念展「竹内栖鳳展―近代日本画の巨人」（10月22日～12月1日）が開催された。まさに京都市美術館ならではの力の入った見応えのある展覧会であった。

国立国際美術館での「フランス国立クリニユー中世美術館所蔵《貴婦人と一角獣》展」（7月27日～10月20日）は驚嘆すべき重要な作品が眼前で堪能できた。まさにテキスタイル工芸の世界的名品ではあるが、一つの展示室でこのような至福を感じることができたのは作品の力とともに、展示のポイントがはっきりとした展覧会であったからであろう。

同じく国立国際美術館「あなたの肖像―工藤哲巳回顧展」（11月2日～1月19日）は放射能とか遺伝子とかの少しも古くならない現代の問題を見せてくれる作品が多数展示され、開催する意義のある展覧会であった。工藤哲巳の全仕事を概観できるものである。伊丹市立美術館の「棚田康司―「たちのぼる。」展」（4月6日～5月26日）は現代の木彫刻の優れた作家として知られているが、

最新作までを、まとめてみることのできる好企画であった。西宮市大谷記念美術館では「國府理未来のいえ」（6月22日～7月28日）という今後ますます注目されるであろう若手作家の作品をとりあげていた。和歌山県立近代美術館の「生誕120年記念 石垣栄太郎展」（9月3日～10月20日）は多数の館蔵品を駆使して、和歌山県立近代美術館ならではの充実した展覧会となっていた。大阪市立美術館の「北魏 石造仏教彫刻の展開」展（9月7日～10月20日）は大阪市立美術館が所蔵する中国の石仏彫刻の中でも、特に造形的に素晴らしい「北魏」に焦点をあて、さらに日本国内に将来された作品もあわせて、極めて充実した展覧会であった。これほどの石仏コレクションを所蔵しているからこそ実現できた企画といえる。

大阪市立東洋陶磁美術館では「森と湖の国 フィンランド・デザイン」展（4月20日～7月28日）で北欧のガラスが紹介され、「国際交流企画展 定

窯・優雅なる白の世界―窯址発掘成果展」（11月23日～3月23日）が開催されている。東洋陶磁美術館には定窯の重要文化財2点を始め、伝世品の定窯の名品が常設展示され、また同時開催として、「人間国宝 塚本快示―定窯白磁の美を追い求めて」という企画展示も開催している。中国の定窯の作品を中国での発掘品、伝世品、現代陶芸といった様々な切り口から定窯の魅力を多面的にみせるという、大阪市立東洋陶磁美術館ならではの展覧会である。この展覧会は国際的にも注目され、海外の美術雑誌でも紹介された。なお海外発信としては、東洋陶磁美術館のコレクションによる日本陶磁の展覧会が中国国内6館で巡回展示され、またベルリン・アジア美術館やシドニーのニュー・サウス・ウェールズ美術館でも特別企画展が開催されている。日本の工芸は海外からも注目を集めていたのが実感された。今後ますます工芸作品の展示が盛んになっていくかもしれない。



「皇室の名品」展会場風景（京都国立近代美術館）

岡山の美術界 —アートイベント花盛り—

上蘭四郎（うえぞの しろう・笠岡市立竹喬美術館）



今年の瀬戸内海は第2回瀬戸内国際芸術祭が開催され、また併せて周辺エリアでアートイベントが多く開かれ、活気に満ちた一年であった。瀬戸内国際芸術祭は3年に一度のトリエンナーレ形式で開催され、2010年に続く第2回は「アートと島を巡る瀬戸内海の四季」と題して実施された。岡山、香川の12の島々と宇野港周辺、高松港周辺を舞台に現代アートの祭典が3月20日に始まり、春、夏、秋の3会期、計108日間の日程を11月4日に終えた。新聞によると会期中の累計来場者数は107万368人に上り、第1回（会期105日）から10万人以上増えたという。今回は岡山県側も協力体制をとり、新たに参加した5島もそれぞれ2万人を超える来場者があった。14会場には207点が出展されたが、閉幕後も94作品が残ることとなり、11月4日以降も各会場には余韻に浸る現代アートファンが訪れているという。

私たち岡山県の美術関係者にとって第1回目は香川県の芸術祭という印象があり、会期中に岡山県の美術館へ芸術祭来場者が流れてくるという現象はあまりなかったように思える。今回は岡山県側から各会場へのアクセスが便利であることが宣伝され、また岡山県内の美術館が芸術祭に合わせて入館料割引の対応をとったことで、現代美術を扱う美術館は賑わいを見せたようだ。何よりも今回は、岡山県内の行政と美術関係者が瀬戸内国際芸術祭を自らに係わるイベントとして捉え、盛り上げようとするムードがあった。

同芸術祭と趣旨や会期を合わせたイベントもいくつか開かれた。最も大きなイベントは岡山県等が主催した「廻遊—海から山から—」で、9月6日から12月25日の会期で行われ、この時評を書く現在も開催中である。岡山県を南北に流れる吉井川流域を中心とする8つのエリアで開催されるアートイベントと、3人のアーティストの滞在制作（レジデンス）によって行われる、「地域と人」「人と人」をアートでつなぐプロジェクトであると開催リーフレットに記す。このイベントは美作国建国1300年記念事業ともリンクしており、中国山地から瀬戸内海を吉井川という一大河川でつなぎ、アートの旅を地域の風土と歴史の中で楽しんでもらおうという企画である。

この「廻遊—海から山から—」は岡山県が2010年に開催した国民文化祭以降取り組んでいる「岡山美術回廊（OKAYAMA ART LINE）」の一環であり、イベントの性格は岡山県民にかなり浸透している。各会場のイベントはボランティアの支援により順調に進行しており、地に根付いたアートイベントに成りつつある。

私はこのイベントの全会場を廻ったわけでないが、特に印象深かった会場をここに紹介しておく。2010年に続く2回目の開催となる赤磐市の「あかいわ ART RALLY 2013」（10月12日～22日）である。赤磐市は古墳時代からの歴史遺産が多い町で、このアートルーは市内20か所の史跡・公園・文化観光施設・学校等に約30名の作家作品

や市民参加の作品を設置し、地域の魅力を再発見しようとするプロジェクトであった。会場は平地だけでなく急峻な山頂にも設けられ、また設置作品も会場の特性と相まって実に変化に富む魅力的な内容であった。その中でも標高508mの熊山遺跡（国指定史跡）に設置された北川太郎の石造オブジェ《時空ピラミッド》は、奈良時代に遡る特殊な三段方形の石積遺構とまさしく時空を超えた一体感を醸し出し、眼下の吉井川と遙かに望む瀬戸内海へ続く悠久な歴史のつながりを創出していた。麓から普通車がやっと通行可能なつづら折りの道を延々と昇って到着すると、異界に紛れ込んだ思いにかられ、この二つの不思議な石造物に魅せられることとなった。

最後に組織的なアートイベントではなかったが、岡山県笠岡市在住の造形作家川埜龍三が瀬戸内海の犬島で行った「犬島ハウスプロジェクト」も今秋の大きな話題となった。川埜は30年前に犬島に

建設された通称「ホワイトハウス」と呼ばれる海の家を犬小屋に見立て、奥行き5.1m、高さ3m、幅2.4mの巨大なイヌを造形し、恒久展示する個人プロジェクトに取り組んだ。イヌの表面は陶板やアンティーク陶器、ガラスなどを使用し、破碎タイル技法で仕上げられている。タイルの制作には1,600人以上が参加し、備前焼の窯などで焼成された後に川埜の手によってイヌに貼られた。またこのイヌは笠岡にある川埜のアトリエ・スタジオ蔵5号から海路で運ばれ、瀬戸内の島々をいわばマーキングしながら犬島に着き、陸路を迎えることなく「ホワイトハウス」を恒久的に棲みかとした。完成後の11月1日から11日まで催された「オープンドッグハウス」でイヌの内部が公開され、イヌの眼で瀬戸内海の天候の変化を実感する不思議な体験をした。

瀬戸内国際芸術祭は2016年にも予定されている。瀬戸内美術回廊が広汎なエリアに拡がることを期待したい。



北川太郎《時空ピラミッド》



川埜龍三《犬島ハウスプロジェクト》

「瀬戸内国際芸術祭」と 「大塚国際美術館」の現状報告

安東七瀬（あんどう ななせ・大塚国際美術館）



2013 年、四国の夏で注目されていたのは、トリエンナーレとして第 2 回目を迎えた「瀬戸内国際芸術祭」であると思う。私自身も、前回に引き続き今回も拝見したが、活気のある地元密着型として定着した感があった。「人を迎える」ということが徹底されていて、現代アートとの距離を「人」によって近づけている。現代アートが「人」ありきという前提で制作されていることを再認識する現場であった。

芸術作品がある場所は、作品を鑑賞し、作品とまたは作家と対峙する場所。そこに生身の人間が介在する余地はないように思っていた。しかし、現実には「瀬戸内国際芸術祭」では、人と人をつなぐことがとても有意義に行われている。現代社会を象徴する現象 Facebook、それを立ち上げたマーク・ザッカーバーグ氏が「人間とは本来繋がりたいと思っている生き物なのです」と言っている、まさにそれを体現化した芸術祭のように思える。日本人の多くが戦後、重要視しなくなっていた地域の「祭」の復活をアートというツールを利用して成功させている好事例である。大塚国際美術館でも Facebook やツイッターを今年から始めたが、このように SNS を利用した情報拡散などから始まり、「つながり」というものを多くの方が美術館という場所に求めているのがわかる。

また、上記の芸術祭の一環で、香川県立ミュージアムの丹下健三生誕 100 周年プロジェクト「丹下健三 伝統と創造 瀬戸内から世界へ」（7 月 20

日～9 月 23 日）も充実した内容で、瀬戸内出身である丹下氏の業績が丁寧に説明されており、丹下氏の業績が戦後の日本の建築史そのものであることが手に取るようにわかるものであった。

ここからは、大塚国際美術館にて行われたことを 2 点ご紹介させて頂きたい。

当館では、小中学生、高校生が「校外学習の場」として美術館を利用するための環境づくりに積極的に取り組み、今年で 10 年目の活動を迎えた。

これまでの教育普及活動の経験と、間近で作品と触れ合える陶板名画美術館ならではのユニークな展示を活かして、夏休みに全国から来館する小中学生を対象にしたプログラムを継続して企画している。2010 年のフランス、2011 年のドイツ、2012 年のイタリア（北部中部編）に続き、今年はイタリア、史上空前の繁栄を誇った古代ローマを取り上げ、文化庁「平成 25 年度 地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」として、夏休み子どもプログラム「名画で体験イタリアめぐり 古代ローマ編」（7 月 21 日～8 月 31 日）を開催した。

当館の古代ギャラリーは、壁画、モザイク、石棺など約 130 作品が一望できる展示空間になっている。その中で、古代ローマに思いを馳せ、古代ローマの生活を疑似体験することで、現代人と変わらない日常生活があったことを想起しやすい環境作りで特化し、古代ローマを体感できる 4 つのプログラムを考案した。次にそのうちの一つをご紹介

する。「体験コーナー 古代ローマヘタイムスリップ」は、古代ローマ人の衣装を再現し、古代ローマ人に変身する体験プログラムである。京都造形芸術大学・芸術学部空間演出デザイン学科の中山和子教授監修のもと古代ローマの衣装を学生の方々が制作した。また、ポンペイの名画《パン屋の夫妻》になりきり、額縁に入って同じポーズで写真撮影したり、古代衣装をまとったまま当時のゲームをしたりできる仕組みを作った。このイベントはとても好評で、40 日間で約 5,400 名の方々が参加した。

カルコン美術対話委員会イニシアチブ『日米美術フォーラム～ミュージアムの未来～』

CULCON Arts Dialogue Committee Initiative “US-JAPAN Art Forum : The Future of the Museum”【第一部】「アート支援の現在と未来」【第二部】「日本美術の保存と公開について」が当館にて 10 月 21 日に開催された。

「美術対話委員会」は、日米間における古美術の分野から近現代美術の分野に至るまで、学芸

員交流等の両国間の交流を強化するため、カルコンの下に 2011 年に設置され、これまでワシントン、東京、ホノルルで 3 回開催され、第 4 回となる今回は徳島の大塚国際美術館での開催となった。それにともない「日米美術フォーラム」が開催され、県内外の美術関係者ら 200 名が公聴した。今回の主旨は、美術館やアートによる地域活性化をテーマとして、実際に美術館やアートによる地域活性化に取り組んでいる現場において会議を開催することによる、活発な意見交換の促進であった。

【第一部】では、美術館運営の為の資金調達について、日米の違いが浮彫になり、日本は新しい資金調達の道を開拓する必要があるという結びとなった。次に【第二部】では、「日本美術のデジタル化の功罪」が主要な話題となり、オリジナルと複製のそれぞれの用途と展望について意見交換がなされた。陶板で西洋名画を再現している当館にてこのような議論が交わされることは、とても興味深いものであった。



古代ローマの衣装をまとった家族



カルコン美術対話委員会イニシアチブ
「日米美術フォーラム～ミュージアムの未来～」の開催風景（写真撮影・提供：文化庁）

それぞれの戦後、回顧して何を思う

那須孝幸（なす たかゆき・北九州市立美術館）

10月、秋晴れの週末を利用して、立て続けに九州各地の展覧会をめぐる。

まず、北部九州の美術館に足を運ぶ。最初に「江上茂雄 風ノ影、絵ノ奥ノ光」展（10月5日～11月10日、福岡県立美術館）、次に「田部光子展 人生が芸術である」（10月1日～12月15日、福岡市美術館）、「森山安英展 第一章 レンズの彼岸」（10月2日～12月1日、黒川INN美術館）、そして「名誉県民 松尾敏男展」（10月2日～11月10日、長崎県美術館）。たまたまだが、共通点は地元在住・出身で現存作家の回顧展であるということ、しかも皆、作家歴が半世紀を超えているということだ。最近、戦後美術を築いてきた要人が次々と他界するたびに胸を痛めていた矢先、元気な長老（？）作家の展覧会である。

明治生まれの江上茂雄（1912年 - ）は現在101歳。15歳で三井三池鉱業所に入社し、いわゆる日曜画家としてクレヨン画、水彩を描き続けた。戦前からの日課は労働争議の大混乱を乗り越え定年後には一層加速し、画歴はじつに90年を超える。会場には作品184点が展示されたが、これが実際には2万を数える絵画のごくごく一部なのだという事実が、この「日曜画家」のただならぬ生きざまを感じさせた。江上の次男であり現代美術家の計太は、貧乏と無学歴、内向的な性格であったことが、江上の江上たる作品世界を支えていると、かつて父について触れている。この江上茂雄展は、福岡県立美術館のほか田川市美術館、大牟田市立三

池カルタ・歴史資料館でも同時開催された。

田部光子（1933年 - ）は1957年の九州派旗揚げから参加し、熱い前衛の時代に気を吐いた女性作家。九州派といえば一昨年、同美術館で開かれた菊畑茂久馬の大々的な個展が記憶に新しいところだが、今回の展示を観ると、田部の活動は九州派という枠だけでは語れないことがよくわかる。80年代末には主婦定年退職宣言を行い再び制作に専念、今回、会場には初期から新作までが並んだ。かつて自身の妊娠体験を背景にした《人工胎盤》（1961年）に始まり女性性を前面に打ち出した挑発的な作風は今も健在だ。

また、田部とほぼ同世代の前衛作家であり1968年から北九州市を中心に活動した「集団蜘蛛」で知られる森山安英（1936年 - ）も、80年代後半から絵画制作を精力的に再開した。今回はここ四半世紀の制作を公開。柳和暢のプロデュースにより、旧校舎の教室を会場に大作を中心とした53点の作品が並び、大胆な筆致ながらもその緻密な試行に驚く。窓から注がれる光に、一面銀色の画面は時間の経過とともに表情を変えてみせた。同会場では森山安英展を3期ほどに分けて随時開催すること、見応えあるシリーズ公開となりそうだ。

松尾敏男（1926年 - ）は長崎市出身の日本画家。1943年より堅山南風に師事し、終戦間もない1949年、再興院展で初入選した。独自の死生観を作品に取り入れ、1960年代に日本美術院賞、大観賞を受賞するなど評価を高めた。院展を中心

に活動を続ける一方、幼少期を過ごした九州への愛着を維持し、作品講評会など日本画普及活動を継続してきた。現在は日本美術院理事長を務め、昨年文化勲章を受章、この秋には長崎県名誉県民となった。同展はその記念として常設展示室で特集された企画である。

皆、昭和・平成と同時代を生き抜いてきた同じ地元現役作家であっても、こうまでジャンルや歩みが対照的な個展を立て続けに観ると、ある意味で戦後地方の美術動向が立体的に浮かび上がったように感じ、同時に、その限られた視野での立体性を自ら疑った。最近、安易に回顧されることによる安易な伝説化への警戒心が強くなっている自分だが、それでも時代を失う前に触れておかなければならないことは山ほどある。発信する側が中心なのだという自覚はもちろん、作家輩出における「地方性」の縛り、地方における「作家性」の感受という問題を前に、今しか許されない行動のなか何を観て何を感じ何を選び何を伝えるか、我々目撃者の責務は重大だと襟を正す。

一方この秋は、続く世代も元気だ。熊本県津奈木町では6月より映画監督・遠山昇司をディレクターに迎え、こちらも廃校の小学校を拠点としたアートプロジェクト「赤崎水曜日郵便局」が始動。「一年目の消息—語りかけることができる『君』」展（9月7日～12月1日、つなぎ美術館）はその開局記念として開催され、熊本市在住の浅井裕介ほか、クワクボリョウタ、下道基行による意欲的な現地制作作品が印象に残った。

鹿児島県では「かごしまアートフェスタ2013」（かごしま県民交流センターほか）が開かれ、今春よりCGアーティストの第一人者・河口洋一郎を館長に迎えた霧島アートの森では同時期に「かかわりのアート」展（9月13日～10月20日）が企画された。メディア系といえば、「第四回北九州国際ビエンナーレ」（ギャラリー SOAP）は今年も健在、ほか3回目となる日韓交流展「WATAGATA アーツフェスティバル2013」（福岡市内各地）で見た鈴木淳の新作は、この旅の最後に立ち寄ったからか、相変わらずの気の抜け加減に何だかほっとする。



「江上茂雄 風ノ影、絵ノ奥ノ光」展（福岡県立美術館）より
※会場には来場者をおもてなしする看視スタッフ「ハンズさん」と子どもたちの姿。



「一年目の消息—語りかけることができる『君』」展（つなぎ美術館）より
※浅井裕介は現地の土を画材として滞在制作を行った。

保存研究部会

根本亮子（ねもと りょうこ・岩手県立美術館）

保存研究部会では通常年2回の会合を行っているが、本年度は昨年度までの定例会合で行ってきたバックヤード見学及びコンディションチェックシートのフォーマット作成に係わる協議などを一時中断し、「東日本大震災美術館・博物館総合調査分科会」と連携して、部会としての活動を同調査の実施及び調査報告書の編集作業に充てることにした（同分科会は保存研究部会員が中心となって構成されている）。

総合調査では3、4名程度の調査員で班を構成し、各県の調査対象館を二班に分かれて訪問して、聴き取りや記録撮影等を行った（7月23、24日の調査は一班）。具体的なスケジュールと調査対象館は以下のとおりである。なお、同調査には全米の募集に応じた保存研究部会員以外のメンバーも参加したことを付け加えておく。

6月4～7日 茨城県内7館

A班：茨城県近代美術館、常陸太田市郷土資料館、日立市郷土博物館、水戸芸術館現代美術センター

B班：茨城県近代美術館（A班と合同）、北茨城市歴史民俗資料館（野口雨情記念館）、茨城県天心記念五浦美術館、茨城大学五浦美術文化研究所（六角堂）

6月13～15日 福島県内8館

A班：福島県立美術館、種徳美術館、福島県歴史資料館、福島市写真美術館、郡山市立美術館

B班：福島県立美術館（A班と合同）、南相馬市博物館、相馬市歴史民俗資料館、いわき市立美術館

6月18～21日 宮城県内5館、岩手県内5館

A班：東北歴史博物館、芹澤長介記念東北陶磁文化館、リアス・アーク美術館、大籠クリスタン資料館、仙台市博物館、せんだいメディアテーク

B班：遠野市立博物館、旧釜石鉱山事務所、釜石市郷土資料館、大船渡市立博物館

7月18～20日 栃木県内6館

A班：栃木県立美術館、宇都宮美術館、益子陶芸美術館／陶芸メッセ・益子、益子参考館

B班：栃木県立美術館（A班と合同）、大田原市黒羽芭蕉の館、那須野が原博物館

7月23、24日 栃木県内1館、群馬県内2館

A班：さくら市ミュージアム荒井寛方記念館、大川美術館、群馬県立館林美術館

調査報告書は各調査員が分担して執筆し、11月6日、7日に兵庫県立美術館で開催した編集会議では、提出された報告書の読み合わせを行い、具体的な編集方針や用語の統一、掲載内容の追加などについて確認を行った。報告書は今年度内に発行予定であり、次回編集会議を2014年1月に開催を予定している。

また、この編集会議は今年度の研究部会会合を兼ねたものであり、来年度から定例会合に復帰し、コンディションチェックシート作成作業を再開すること、会合は関東以西の館で開催することなどを確認した。



岩手県立美術館バックヤード見学（2月16日）第43回会合より

教育普及研究部会

清家三智（せいけ みさと・名古屋市美術館）

教育普及研究部会では例年2回の会合を開催しており、本年度もその予定で準備を進めている。

最初の会合は11月14日、15日に実施し、1日目は国立西洋美術館の講堂で行った。当部会では日本の美術館における教育普及の草創期をどう記録するか、特に担当者がその活動の拠り所とした理念を残し、次の世代にどう継承していくかという課題と向き合いながら、2008年より公開インタビューをたびたび開催し記録化している。今回は日本の美術館の中でもかなり早い時期から意識して「古美術を普及する」活動を行っていた東京の五島美術館で長く学芸員を務められた竹内順一氏（現・永青文庫館長）をお招きしてインタビューを行った。専門分野の深い見識を持ち合わせながら多岐にわたる普及プログラムを運営し、「博物館問題研究会」では博物館、大学関係者などとの意見交換し、社会教育という広い観点から美術館は何をすべきかを考えてこられた氏の話は、実践的かつ非常に示唆に富むものであった。2011年度末に行った酒井哲朗氏（当時・福島県立美術館館長）へのインタビューとともに、出来るだけ早く会員館職員の皆さんと内容を共有できるよう努める。

なお、会の冒頭には、新規加入する部会員が多い当部会の特性を鑑みて、自己紹介のほか連絡事項と

して全米HPのアーカイブ機能の紹介、過去の部会活動の報告書をダウンロードする方法などのオリエンテーリングを行った。冊子の形態では残っていない資料が共有されることで、教育普及活動に対する各自の思索が深まることを期待したい。

2日目は場所を日本橋の三井記念美術館に移し、普及担当員の亀井愛氏から現在取り組んでいる教育普及活動とその課題についてご紹介いただいた後、この秋より根津美術館、五島美術館とともに行っている「茶陶三昧キャンペーン」についてもお話しいただいた。

2回目の会合は、2014年3月中旬に兵庫県立美術館での開催を予定している。近年、美術館・博物館は多くの市民ボランティアやインターン、友の会会員などによって支えられているが、その守備範囲は美術館活動の一部に限定されていることが多い。関西を中心に、美術館・博物館の資料収集活動の支援を行っている市民グループ「美術館にアートを贈る会」、「なにわホネホネ団」をはじめとする複数の団体にその活動の経緯や理念について詳しい話を聞くことで、市民による美術館・博物館支援のあり方について可能性を探り、美術館・博物館関係者は市民とのコミュニケーションをどのように図っていくべきか考える機会としたい。



第42回会合インタビューの様子



第42回会合 三井記念美術館の活動紹介

情報・資料 研究部会

川口雅子（かわぐち まさこ・国立西洋美術館）

情報・資料研究部会は昨年度に引き続き、全美術館が刊行した収藏品目録を対象にその文献目録をまとめる編纂作業に取り組んだ。これまで当部会はどちらかと言えば美術館情報システムやホームページ等のデジタル化の話題に関心を寄せてきたが、今回の取り組みはその路線転換を図り、等閑にしてきた伝統的媒体の印刷物にも目を向けて、新たな視座からコレクション情報の問題に取り組もうとするものである。

ここに至る経緯については、去る3月の学芸員研修会や本誌第4号収録論文（鴨木年泰「所蔵作品情報のデジタル化と発信」）で述べており、詳しくはそちらに譲るが、一点付け加えるとすれば、作品情報をめぐる議論でデジタル化の話題に終始しがちだった部会において、当時部会長であった山脇佐江子姫路市立美術館館長（当時）が多くの美術館におけるそれ以前の厳しい現実に対して注意を喚起してくださったことである。そこから、多くの会員館と共有できる現実的課題は何かを模索するようになり、冊子体の収藏品目録というテーマが浮上した。電子データの公開は先送りしても、目録の刊行は優先すべき課題と捉え、作品調査の成果を蓄積してきた美術館は少なくないだろうと期待を込めたことでもある。

さて昨年度の予備調査により、目録が刊行されていれば、その多くは東京国立近代美術館に所蔵されることが判明しており、新部会長に越智裕二郎広島県立美術館館長を迎えた今年度は同館書庫で現物を確認



第30回会合（東京国立近代美術館、2013年7月）

することから始めた。約350の会員館について、どのような目録が刊行されているか、複数刊行されている場合にそれぞれどう位置づけられるのか（統編か改訂版か）、総目録がない場合に代替となる作品選集は刊行されているかといったことを現物に当たりながら調べた。実施は4月15日、5月27日、7月16日の3日間におよんだ。

作業は皆で手分けして進めたが、議論が白熱したのは、特定の美術館について目録や選集はあるものの、どれが現時点での決定版とみなせるか判別困難だった場合である。そのたびに、美術作品の国内所在調査に役立つ基礎資料作成という原点に立ち返り、また「収録対象は『貴館コレクションを調べるには何を参照すればよいか』と問われたときに提示するもっとも網羅的・基礎的な資料」という編集方針を持ち出して、まさに口角泡を飛ばしながら討論を重ねた。それで判断がぶれなかったかと言うと、やや心もとない。この調査結果を磨き上げていくのが今後の課題である。

仮称「収蔵作品目録の目録」は最終的には全美ウェブサイトで公開する計画である。当部会の編集責任において掲載する予定だが、全美という場の性格を鑑み、部会独自の判断だけではなく各館のご意見も仰ぐべきとの結論に達し、近く当部会による館別収藏品目録等一覧を各館宛に郵送させていただく予定である。どうぞご覧いただき、漏れや誤りがないかをご確認いただければ幸いである。



書庫での現物調査（東京国立近代美術館、2013年7月）

小規模館 研究部会

宮崎 徹（みやざき とおる・鎌倉市鶴木清方記念美術館）

小規模館研究部会は、今年度も2回の研究部会を開いた。今年度の活動テーマは、総合防災マニュアルの作成である。阪神淡路大震災、新潟県中越地震、東日本大震災などの地震、津波、液状化などの災害や、近年の気候変動に伴う集中豪雨に端を発する浸水、河川の氾濫、土砂崩れ、落雷、突風、また、火山、原子力発電所や原子力関連の施設、基地施設などにまつわる災害も懸念されている。それに加え、防犯、防虫、展示・保存環境等、さまざまな事柄から人命と作品・資料を守らなければならない。

それらの一つ一つについて、各美術館が対応マニュアルを作成していることが望ましいが、公立館や複合施設では、自治体全体と足並みをそろえなければならないかったり、教育委員会が他の施設と足並みをそろえて欲しいと望んだり、建物に入っている他の施設と同じ行動マニュアルでなければならないかったりして、現状では設立に伴い作成された火災時の避難マニュアルのみが存在する場合もあるようだ。しかし、実際に災害が訪れた時には、すぐに行動をとらなければならない、関連機関の指揮命令下にあつては、連絡も届かず、または、指揮系統が機能しなくなっている場合もあり、現場に居合わせる職員にとっては、なくてはならないものが災害別の行動マニュアルであるのではないか、と思う。

このように、総合防災の立場で美術館の保全を考えると、対応すべき内容が多岐にわたり、そのマニュアル化は、各館にとってあまりにも負担が大きく、また、盛り込む内容で思いつかないものもある。そこで、被災を経験した館と連絡を取りながら、数ある対象の内、今回は地震についてまとめることにする。

過日、5月31日に第37回会合を開き、あらかじめ配布した文案について検討し、それに基づいて、地震の部分については今の段階での完了品として配布する。この作成マニュアルは、前半部分ではどん

なことに対応しなければならないかを表にしてビジュアル的に表している。それに基づき、後半では実際の例を想定しながらどのような文案が考えられるかを提案している。

12月に鎌倉で行われた第38回研修会・会合では、防災関連の講演会に基づき研修を行い、各館がどのように次の災害に対応すべきかを考えた。

防災マニュアルは、時代の考え方やインフラ・設備の近代化、価値観や組織の変化によってその時々にも手を加えていかなければならないものである。どの時でも、美術館・博物館が何の目的で設置されているのかということを思い起こしながら、最善の方法を考えていなければならないだろう。

また、各館のマニュアルの作成は勿論であるが、大規模災害が起こった時に、被災していない館からのアプローチ、被災状況の把握、支援の必要性の有無、支援準備と活動について、事前にどこがイニシアティブをとるのか、手順はどうするのかなどもマニュアル化していくべきではないかと考えている。例えば小規模館研究部会に所属する館については、ブロックごとの幹事館が所属館について取りまとめを行い、全美の事務局と連絡を取ることも検討できたらと思う。



第37回会合（栃木県立美術館）

ホームページ 部会

宮武 弘 (みやたけ ひろし・福島県立美術館)

ホームページ部会は、全国美術館ホームページ (<http://www.zenbi.jp>) の運営にあたって、全美術事務局、パークウェブ社と連携しながら活動している。全美ホームページは 2012 年のリニューアルによって CMS (コンテンツ・マネジメント・システム) へと移行したことで現在、日常的な更新業務の多くは事務局で担当しており、4 名の部会員は他の部会との調整を要する案件をはじめ、ホームページ全体に関わるサポートを行っている。今回は 2012 年度下半期および 2013 年度上半期の活動についてご報告したい。

まず 2012 年 12 月 20 日に、京都国立近代美術館で第 25 回会合を開催した。ここでの課題は、「東日本大震災特設サイト」(<http://www.zenbi.jp/earthquake/tohoku>) の見直しである。東日本大震災の発生を受けて 2011 年の 5 月に立ち上がった「特設サイト」は、急ぎよ制作されたこともあり、記載すべき情報が漏れていたたり、閲覧のしやすさの面でやや不備も見られた。会合においてそれらのチェック、修正作業を行い、その成果として 2013 年 2 月 15 日より、バージョンアップした「特設サイト」を公開することができた。(加えて同月からは機関誌部会との連携により、機関誌『ZENBI』の PDF ファイル公開も始まっている。)

また 2013 年 3 月 25 日には、第 27 回学芸員研修会「歩み続ける美術館—全国美術館会議研究部会の活動」において、浜田拓志事務幹事(和歌山県立近代美術館)が発表。「アーカイブ共有と情報発信」と題して、部会発足の経緯から全美ホームページの立ち上げなど、今日までの活動を振り返った。

続いて 2013 年度の活動としては、5 月 31 日に宇都宮美術館において第 26 回会合を開催。全美ホームページにとって大きな節目となった CMS 化を経て、残る懸案事項について意見交換を行って

いる。1 点めはホームページ開設当初より計画のあったコンテンツの具体化である。サイトへの掲載という一方的な情報配信にとどまらない、会員館相互に役立つ情報交換の場を提供したいというアイデアはかねて部会内外から挙がっているものだが、いまだ実現をみていない。また教育普及関連コンテンツについても以前は掲載されていたものが現在は閲覧できなくなっており、過去の資産として有効活用していくことを確認した。2 点めはユーザビリティの更なる向上である。トップページのメニュー構成を見直したことで以前に比べれば改善されたとはいえ、必ずしも希望するコンテンツにすぐにたどり着けない場合もある。「著作権問題」「博物館法改正」等、一般の関心が高いテーマごとにバナーを設けることも検討していく必要があるだろう。このほか、会員館以外でも閲覧できる一般向けコンテンツの一層の充実や、速やかな情報掲載を実現するための枠組み作りなど課題はまだ山積しており、こうした細かなチューニングともいえるべき作業は次年度以降も継続していくことになりそうである。

また当部会では引き続き、アドバイザリーとしてご協力いただける新規メンバーを募集している。メールでの連絡や意見交換を中心とした活動が中心となるので、興味を持たれた方はぜひご連絡をいただきたいと思います。



第 26 回会合 (宇都宮美術館)

機関誌部会

尾崎信一郎 (おさき しんいちろう・鳥取県立博物館)

機関誌部会は今年度、全国美術館会議機関誌『ZENBI』の 3 号と 4 号を予定どおり発行した。今年 1 月 31 日に発行した 3 号ではブロック報告と部会報告という報告記事とともに「全美フォーラム」に 6 本の原稿を掲載した。内容としては 2 号に引き続き美術館倫理規程について触れた文章から、普及活動、アジアとの交流、日本美術を海外で紹介するうえでの翻訳のテクニック、美術館におけるパフォーマンスと幅広い主題のテキストが寄せられた。8 月 1 日発行の 4 号では報告記事としてはブロック報告と 10 館と例年になく多い新規会員館紹介を掲載した。また 5 月の総会において、青柳正規会長に代わって建島哲新会長が選任されたことを受けて、青柳前会長には会長をお務めいただいた 6 年間の回顧を、建島新会長には会長としての抱負を、それぞれお寄せいただいた。「全美フォーラム」では 4 本の原稿を掲載した。美術館評価の問題やニューヨークで開かれた日本の戦後美術を回顧する展覧会のレビューのほか、情報・資料研究部会に協力いただいて美術館が保有する情報のデジタル化について二編の原稿を掲載した。フォーラムへの投稿が依然

として少ないこともあり、今後もほかの部会と協力して特集的な内容を掲載することも検討したいと考えている。

ブロック報告については毎回理事から推薦を受けた美術館職員に執筆を依頼している。面倒なお願いにもかかわらずいつも多くの方に協力いただき、感謝している。地域ごとの美術に関する話題をまとめるという作業は簡単なようで難しい。地域的なまとまりのあるブロックと便宜上まとめられたブロックがあり、ある程度テーマを決めて書くか、網羅的な内容とするかについても執筆者に一任している。それぞれに苦勞して執筆いただいている様子は原稿からもうかがえるが、現在、都市部の大がかりな展覧会ばかりに情報が偏り、長いスパンで美術界を回顧する記事としては年末の新聞各紙のベストテン的な記事しかない状況に対して、これらの報告が貴重な対案を提示することができると信じている。

懸案の広告と一般向け販売についても少しずつ進捗しており、ひとまず本号は国立西洋美術館と京都国立近代美術館のミュージアムショップで販売される予定である。



第 15 回会合 (京都国立近代美術館)



第 16 回会合 (京都国立近代美術館)

美術館運営制度 研究部会

大島徹也 (おおしま てつや・愛知県美術館)

美術館運営制度研究部会では、ICOMの“Code of Ethics for Museums”（イコム職業倫理規程、1991/2004年）、日博協の「博物館の原則 博物館関係者の行動規範」（2012年）を参考にしつつ、全美による「美術館倫理規程」ないし「美術館関係者の行動規範」の制定についての検討を昨年度から引き続き進めている。

今年度の第1回目として5月31日に行った第18回部会（栃木県立美術館）では、部会員各自がICOMの倫理規程及び日博協の行動規範を読み直してきた上で、全美として独自の倫理規程/行動規範を制定する必要があるか否か、また、必要があるとしたらどのようなものが望ましいかを、部会として改めて検討した。

部会員からは、「美術館を含む日本の各種館園を対象とした日博協のものがすでにあるのだから、全美独自のものを新たに作るよりも、日博協のものを美術館関係者に周知することの方が重要ではないか」といった意見も出たが、議論の結果、日本の美術館の条件や状況に即した独自のものがあつた方がよいということで、当部会としての方向性が定まった。

全美独自の倫理規程/行動規範の制定目的については、「日本の美術館及び美術館関係者に対して全美として基準ないし指針を示すことで、美術館活動の向上に役立ててもらいたい」、「美術館の理念

やあり方を提示し、それを社会において広く理解・認知してもらうことで、美術館活動の支えとなるようなものになりたい」、「美術館の未来像を描く際の拠り所にもなるようなものであったら」といった意見が出された。

形式と内容については、主として日博協の「博物館の原則」「博物館関係者の行動規範」を参考にしつつ、美術館とは関係のない事柄を省いたり、美術館特有の問題を補足したり新規に設定したりすることを考えている。その際、全美の「美術館基準（案）検討会」によって2001年に作成された「博物館法検討委員会中間報告 美術館基準（案）に対する提案 日本の美術館の指針（案）」も活用していきたい。

今後、当部会としては、全美理事会に提出する倫理規程/行動規範の部会案の作成に取り掛かることを予定しているが、それに先立って各会員館にアンケート調査を行うことにし、現在その準備を進めている。そのアンケートでは、全美独自の倫理規程/行動規範の必要性の有無を尋ねるところから始め、必要であると考え館からは、全体的な方向性についての意見や検討すべき個々の事項などを募る。このアンケート終了後にまた部会を開き、アンケート結果を参考にしつつ、当部会として全美独自の倫理規程/行動規範の制定にどう取り組んでいくかを改めて議論する予定である。



ICOM「イコム職業倫理規程」
(1991/2004年)



日本博物館協会
「博物館の原則」「博物館関係者の行動規範」
(2012年)

『ZENBI』では、 次の要領で広く皆さんからの 原稿をお待ちしています。

〔原稿の内容〕

- ・ 展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けるけつきます。
- ・ 原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
- ・ 原稿には表題を付してください。

〔投稿の資格〕

- ・ 全国美術館会議に所属する美術館博物館の職員であればどなたでも投稿できます。
- ・ 匿名の投稿は受けつけません。

〔投稿に係る詳細〕

- ・ 原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

〔締切〕

- ・ 第6号（2014年7月発行予定）に関しては4月30日、第7号（2015年1月発行予定）については10月31日を締切とします。（当日必着）

〔提出先〕

メールの場合

matuyama@ma7.momak.go.jp

郵送の場合

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町

京都国立近代美術館内 全国美術館会議機関誌部会
幹事 松山利光

〔問い合わせ先〕

内容に関する問い合わせは下記に御連絡ください

〒680-0011 鳥取市東町2-124 鳥取県立博物館内

全国美術館会議機関誌部会

幹事 尾崎信一郎 E mail: s-osaki@pref.tottori.jp

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

1. 全般事項

- (1) 本誌への投稿者は原則として全国美術館会議会員館職員に限る。
- (2) 投稿原稿は他誌（電子媒体を含む）に発表されていないものに限る。
- (3) 原稿（写真を含む）は原則として電子メールで提出すること。
- (4) 原稿は原則として2,000字程度とする。

2. 投稿文の採否

- (1) 投稿文の採否、掲載順などは全国美術館会議機関誌部会（以下「部会」という。）に一任とする。
- (2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について

- (1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
- (2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
- (3) 個人を特定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
- (4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について

校正については、初校をもって著者校正とする。その後は部会の責任とする。

5. 著作権について

- (1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は全国美術館会議に帰属するものとする。
- (2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典（掲載誌名、巻号ページ、出版年）を記載するのが望ましい。

6. その他

- (1) 原稿料は支払わない。
- (2) 掲載投稿一編につき、本誌5部を進呈する。

福島県内の文化財救援について

企画担当幹事 村上博哉（むらかみ ひろや・国立西洋美術館）

「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」は、全国美術館会議をはじめ多数の団体が参加して2011年4月に立ち上げられ、被災地の文化財レスキュー事業にあたりましたが、緊急事態への対応という当初の目的を果たしたことから、昨年3月末をもって解散しました。丸2年にわたった救援委員会の活動の概要は、同委員会の『平成23年度活動報告書』及び『平成24年度活動報告書』にまとめられています。また、昨年1・2月、文化財レスキューの成果と課題を総括する公開討論会が開かれ、その記録が『語ろう！文化財レスキュー 被災文化財等救援委員会公開討論会報告書』として7月に発行されました。これら3冊の報告書は全美の全会員館に送付済みですので、各館でご活用ください。

救援委員会の解散後、レスキュー事業は各県教育委員会を中心とした組織に引き継がれましたが、救出した文化財の管理と修復、所有者への返還など、なお多くの課題があります。特に、福島第一原発周辺の警戒区域に指定されていた地域には、救出すべき文化財が多数残されています。福島では県市町村の教育委員会と県内博物館・美術館等による「福島県被災文化財等救援本部」が作られました。この地元組織との連携のもとに、より大

きな体制で文化財レスキューを進めるため、昨年8月、文化庁と国立文化財機構を中心とする「福島県内被災文化財等救援事業」が新たに発足しました。全美は文化庁から同事業への協力要請を受け、9月の臨時理事会で参加を決定し、日本博物館協会とともに協力を行っています。

福島におけるレスキュー事業の当面の課題は、旧警戒区域の双葉町、富岡町の歴史民俗資料館に残る資料を運び出し、相馬市の一時保管所（旧相馬女子高校舎）へ収容することです。資料館内の放射線量は人体に影響をおよぼすレベルではなく、資料にも問題はありますが、今後カビや虫の被害の恐れがあるため、2012年夏から資料の運び出しが徐々に進められてきました。両館とも考古・民俗資料が中心で、美術品はほとんどありません。しかし、様々な組織が専門分野を超えて連携協力を行うことの必要性は、これまでの文化財レスキュー事業を通じて多くの人々が強く意識するようになっており、美術館の学芸員がこうした資料の救出に関わるのも有意義なことです。福島県の救援本部の中でも、福島県立美術館が県教委、県立博物館とともに中心的な役割を担っています。

福島での作業は月に1～2回のペースで行われており、全美は9月下旬から参加を始めました。最

初は9月26・27日に双葉町歴史民俗資料館内で、資料の放射線量の計測、撮影、梱包作業。10月30・31日には、同資料館からトラック6台分の資料を運び出し、相馬市の保管所へ収納しました。10月の作業は、福島県内の関係者と県外各地からの派遣を合わせて総勢40名以上で行われ、全美は福島県立美術館・いわき市立美術館から学芸職員各2名、県外の会員館から6名の参加がありました。館内では埃を吸い込まないようにマスクを着け、屋外の搬出作業には防護服を着用するなど、十分な安全管理のもとで作業が行われています。

第一原発から約4kmの場所にあり、「帰還困難区

域」として立入りが厳しく制限されている双葉町の資料館周辺は、倒壊した家屋にも手がつけられず、震災の日以来時間が止まった状態です。いわき市ー双葉町ー相馬市を資料搬送のために往復して、住民が戻れない地域の広さを実感しました。地元の関係者も様々な業務に忙殺され、その合間をぬってレスキュー事業に取り組んでいるため、県外からの応援が必要とされています。福島への派遣は全美事務局でとりまとめているので、参加の意思をお持ちの方は事務局までご一報いただき、派遣者登録をお願いいたします。

編集後記

ZENBIの第5号をお届けする。以前、理事会でZENBIを発行する方針が決まった際にある理事から「何があっても5号までは続けるように」と釘を刺されたことを覚えている。（これは私の記憶違いで5号ではなく、5年間であったという話もあるのだが）創刊号から2年、無事ここに第5号を発行することができて編集者としてほっとしている。

今号も多くの方々の協力のおかげで発行することができた。お忙しい中、突然の依頼にも関わらず、快く原稿を引き受けていただいたブロック報告の報告者の皆さん、部会幹事の皆さんにあらためて感謝を述べたい。今回は依頼の手違い

のため、フォーラムの原稿が少なかったことが残念である。引き続き多くの方々からの投稿をお待ちしている。

依頼できなかった原稿の一つは今なお続く福島原子力災害に関する記事である。旧警戒区域に残された文化財のレスキュー事業については「事務局から」の中に村上企画幹事の報告がある。震災から2年半が経過し、本誌でも震災に関する記事こそ減ったが、私たちはなおも震災後の重い現実の中を生きている。震災と原子力災害は今後、日本の美術館にもボディブローのように鈍く重い、長く続く痛みを残すことになるのではないだろうか。（〇）